

## ずっと「普通」になりたかった

グニラ・ガーラント著 ニキ・リンコ訳

## 必要に迫られて

- 私は、自分のやっていることが他人には変に見えたり、不快に見えたりするとは知らなかった。解っていたのはただ、自分が必要に迫られてやっていることだということだけだった。

## 笑い

- 私は大人たちが笑うのが嫌いだった。
- 突然のことで予測がつかないし、恐怖だった。

## かんしゃくの原因

- ずっと前に起きたことの記憶が、目の前のことと結びついて、かんしゃくの原因になることもあった。

## ささやき声

- ささやき声だけは、いつでも楽に聞こえるのだった。だが普通、そんなことがあるはずはない。ある声は聞こえるのに別の声は聞こえないなんて、普通の人間にはあり得ない。
- ささやき声は全然違う。ささやき声は、いつでもどんな遠くからでも、まっすぐ頭に飛び込んでくる。

## 例の「感覚」

- 成長するにつれ、私の中で、「こんな自分ではいけない」という「感覚」が次第に大きく、鮮やかになってきた。姉と同じように反応するのが当然なのだ。自分の反応は間違っている。異常だ。- でも一方で、例の「感覚」によれば、そういう反応は自然に起きなければいけないらしいということも解った。

## ボディイメージ

- 一人ではしごを降りるなんて無理だった。自分の腕や脚力がどこにあるかという感覚もないのに、どうしてはしごなど降りることができるだろう。

## 独特の視覚

- 私の視覚は非常に鋭かったが、色も形も大きさもよく似たものがたくさん並んでいると、みんなくっつきあってしまい、見分けられなくなることがあった。もしかしたらそれは、絵に描かれていた生き物たちが、私にとっては何の意味を持たなかったせいかもしれない。

## 教室という環境

- 教室という場所自体、どこであろうと私にはあわなかった。私の耳には、先生がぺらぺらしゃべる声が背景となった。そのうえに雑多な音が重なってくる。紙をめくる乾いた音、椅子のきしむ音、誰かの咳。すべてが聞こえている。音と音とは重なり合い、どけあってしまう。

## 異常な感覚

- 感覚が人と違っていたのは、痛覚だけではない。私はシャワーを浴びることができなかった。水滴が皮膚を伝う感触に耐えられないからである。水滴は痛い。水滴には細かな鋭い棘がいくつもあって、皮膚に突き刺さる。身体はどこを洗うにも、浴槽のお湯の中で洗うことしかできなかった。

## 他人の悪意

- 他の人たちには、たとえ自分ではそんなことをしないにせよ、他人の悪意というものが理解はできるし、気がつくこともできるらしい。そして、悪意のある人には用心しなくてはならないということも知っているらしい。でも私にはそれが欠けていた。

## トイレの感覚

- 私はトイレに行かなければいけないというのを、自動的に感じるができないため、いつ行くべきか、常に頭で考えて計算しなくてはならなかった。まさか他の人たちには、ぎりぎりにならないうちから必要を知らせてくれる信号システムが備わっているなんて、知らなかった。私にはそんなシステムはなかった。何も感じない。

## みんなと比べる

- 私はひどく孤独だった。そして次第に、孤独に苦しむようになっていった。一人でいることが辛かったわけではない。自分をみんなと比べるのが辛かった。そしてみんなと同じように、正常に、真つ当に、普通になりたいと思うのが辛かった。

## 般化が難しい

- 私は直観的に、自分のような神経系で物事を理解するには、経験が必要なのだという事に気づいたのだ。自分が一つの場面で身につけた知識を、自動的に別の場面にも適用することができない。それなら、心の準備をするためには、できる限りたくさんの場面を経験すればよい、そう考えたのである。

## 思春期の頃

- 一度かんしゃくが増えた時期があったが—自分には我慢できない状況に放り込まれそうになると、相手かまわずわめき、かみつぎ、ものを投げたものだが—それ以降は減っていった。
- 自分が何をしているのかも知らないまま、私は母の髪の毛をつかんで、頭を床にぶつけた。

## 言葉を話すこと

- 言葉を話すのは私にとって重労働だったのだが、それにも気づいていなかった。話をするためには、まず、台詞を考えなくてはならない。私の場合それはほとんど、頭の中で原稿を書くというに近い作業なのだ。

## 辛抱強さ

- 私は子どもに何をされようと、決して腹が立たなかった。子どもがいくらむずかろうと、だだをこねようと、同じ事ばかりしつこく繰り返そうと、まるで平気だったので、自然とみんなが持て余した子どもを担当することが多くなった。

## 即物的な解釈

- 私は何でも即物的な解釈をするので、老人たちを理解するには向いているようだった。確かに、老人たちの表現は一見、混乱しているように思えるかも知れない。でも私には逆に、何か具体的で論理的な訴えだとわかることが多かった。

## ちょっとそれ

- 「ちょっとそれ」という台詞を何百回聞いたところで、決して自動的に解るようにはならないのだ。いくら経験を積んでも、やはり毎回、意識的に解釈しなければならないことには変わりはない。

## 人に解ってもらえない苦しみ

- 言いたいことが通じなくて苦しんでいるエルザの姿は、わたしと同じだった。人にわかってもらえないときどんな気持ちにするものか、私はよく知っていたから、自分が力になれたと思うと、満たされる思いだった。

## シナリオのない芝居

- ふと気がつくと、そこは舞台の上。周りでは芝居が進行している。本番らしい。自分以外の全員が台詞を知っている。なのに自分一人が、台本を読んだこともなければ、自分が誰の役なのかも知らない。第一これがなんという物語なのかさえわからない。」

## 障害児が健常児と育つ問題点

- それは時に、二重の意味で屈辱的な経験になることがあります。一つは人と同じ事ができないのに、理由が解らないので、自分のせいだと思ってしまう屈辱。もう一つは、みんなとの能力の差を埋めようとせっかく自分で工夫したやり方を、不自然だ、ごまかした、卑怯だと思ってしまう屈辱です。

## 混沌とした環境

- 託児所のように混沌とした環境では、感覚刺激をより分けて解釈するのが大変になり、ひどくエネルギーを消耗してしまう

## 診断は大きな救い

- 自分にも障害があると知って、二重の屈辱から解放されたのですから、みんなと同じ事ができないのは自分のせいではないことが解るし、勘で分からないことを計算で補うのはごまかしても何でもなく、自分にあったやり方なのだと思えるようになったからです。